

再発見・牛久第十九話

牛久市文化財保護審議委員

栗原 功

牛久と由良家①

豊臣秀吉に由良国繁が牛久五四三五石を宛行われる―牛久ほか11カ村―

由良国繁

―小田原城主北条家に

金山城を明け渡す―

天正10年(1582年)3月に織田・徳川連合軍に攻められて滅びた武田勝頼の上野国(現群馬県)の領地は信長の家臣で関東管領の滝川一益が支配していた。同年6月2日に、本能寺(京都市中京区)において織田信長が家臣の明智光秀の急襲を受け、自刃すると、6月9日の晩、厩橋城(前橋城)の滝川一益のもとに飛脚が到着してそのことを告げた。

これを聞いた小田原城(現小田原市)の北条氏直は、上野国へ大攻勢をかけた。6月19日の戦いが、北条家と滝川家の決戦となった神流川合戦である。

この神流川合戦で、一益は敗北し、一益の上野国退去という結果となり、上野国の諸将と北条家(氏直)との間に主従関係が生じた。

金山(現太田市)城主由良国繁・館林(現館林市)城主長尾顕長兄弟も、翌天正11年3月には、血判の起請文を交換して、再び(父成繁の代にも北条家に従属していた)北条家(氏直)に従属することになった。

ところが、天正12年(1584年)2月、厩橋城接収のときに北条氏直から国繁と顕長は、金山・館林両城の明け渡しを要求された。これを拒否した由良兄弟は、小田原城に連行されて幽閉された。主君が幽閉された金山・館林両城は、兄弟の母妙印尼(成繁未亡人・輝子)を中心に家臣たちが籠城して北条家に抵抗した。しかし、同年(天正12年)12月下旬に、北条氏直の叔父氏照の軍勢が攻勢をかけてきたので金山城と館林城は、開城して、北条

家に降服した。金山城開城後、国繁は桐生城に移り、館林城の顕長も足利に移った。

豊臣秀吉より妙印尼

に常陸国牛久など

五四三五石を宛行う

朱印状が発せられる

豊臣秀吉は、天正17年(1589年)11月、小田原城の北条氏直に宣戦布告した。

氏直は、国繁に11月2日付の印判状を発して、秀吉との開戦の時は直ちに出馬すること、この度はまず10日までに200人の軍勢で利根川端まで参陣することを命じてきた。翌天正18年の正月6日に発した書状では国繁・顕長兄弟と北条家の支配下にある上野国の武將たちに家臣を召し連れ、同月15日に小田原城に籠城するよう命じてきた。

秀吉は同年(天正18年)3月に至って、21万の大軍をもって小田原に押し寄せ、金山城は同年5月2日に秀吉麾下の前田利家らによって接収された。

国繁・顕長兄弟の母妙印尼は、利家を通じて国繁・顕長兄弟の

進退の執り成しを願い出た。利家からは、妙印尼に同年6月7日、『由良家安堵の秀吉の意向』が伝えられ、同年8月1日、秀吉から妙印尼に対して朱印状の下付があつて、新たに常陸国牛久(現牛久市)に知行を与えられることになった。慶長3年(1598年)1月に改めて国繁に下付された知行目録によると、牛久ほか11カ村の内5435石であつた。

妙印尼の執念による行動の結果、金山城の返還は達成できなかったが、清和源氏の正統で、八幡太郎源義家を遠祖に、さらにその義家10代の子孫にあたる新田義貞を先祖にもつ由良家の名跡(家名)を後世に伝えることはできたのであつた。



国指定史跡・金山城跡

由良家が居城にしていた。

【写真提供】群馬県太田市教育委員会